

DICTIONNAIRE  
STANDARD  
FRANÇAIS-  
JAPONAIS

---

スタンダード  
佛和辞典

---

鈴木信太郎 中平 解 渡辺一夫  
朝倉季雄 家島光一郎 武者小路実光  
三宅徳嘉 松下和則 田島 宏  
共 著

大修館書店

DICTIONNAIRE  
STANDARD  
FRANÇAIS-  
JAPONAIS

スタンダード  
佛和辭典

鈴木信太郎 中平 解 渡辺一夫  
朝倉季雄 家島光一郎 武者小路実光  
三宅徳嘉 松下和則 田島 宏  
共 著

大修館書店

## 序

日本で初めてフランス語を修めた學者は、村上英俊(1811-1892)であらう。英俊は親友の佐久間象山から佛文習讀を勧められ、1848(嘉永元)年から蘭佛辭典を筆寫して獨習し、三年の後に漸くフランス語を解讀し得るやうになつた。彼は後進の便を慮つて、佛英蘭三ヶ國語が對照される「三語便覽」三冊を1854(嘉永七年)に刊行した。これは振假名つきの一種の單語帖で、まだ辭典とは言へないが、初めてフランス語と日本語とを結んだ尊い絆であつた。英俊は更に研鑽十年の後、1864(元治元)年に「佛語明要」四冊(「明要附録」一冊明治三年)を刊行した。木版和綴本で、版下は英俊自身が驚ペンを削つて書いたのであつた。ABC順による最初の佛和辭典で、今から僅か九十三年前の著作である。

其後七年、1871(明治四)年に、寄陽(長崎)の好樹堂譯「佛和辭典」Nouveau Dictionnaire Français-Japonais が、上海の米國長老教會印行で發兌された。これは M. Nugent 著の小型佛英辭典の翻譯であるが、内容體裁ともに「佛語明要」よりも遙かに進歩してゐた。印刷は活字を使用し洋裝の本に仕立てたが、まだ日本語を横組みにする工夫には氣が附かなかつた。

1887(明治二〇)年に至つて、中江篤介(兆民)が校閲し、その門下野村泰亨、伊藤大八等五氏が協力編纂した「佛和字彙」Dictionnaire Universel Français-Japonais が出版され、好樹堂譯上海版よりは内容の複雑な、やや近代的辭典らしい姿を見せた。一語の語義が、數個の日本語に解釋されるやうになつたのである。

其後二十世紀に入り、1905(明治三八)年に、公教宣教師ラグ E. Raguët と小野藤太共編の「佛和會話大辭典」Dictionnaire Français-Japonais が、東京・ブリュッセル・パリの三書店を發行所として刊行された。この辭典に於いて初めて、各語がその語義によつて分類され細別され、數字記號の下に纏められて排列された、近代辭典の形態を整へたのである。但しラグ師は、特に外國人の使用のために、漢字とローマ字のみによつて解釋を施したので、時には語のニュアンスが明確に掴み難く、一般日本人には甚だ讀みにくい文章となつた。

1910(明治四三)年には野村泰亨の「新佛和辭典」が大倉書店から刊行されたが、これは片々たる小辭典であつた。私がフランス語を習ひ始めた頃には、この辭典とラグの「大辭典」とを頼りとする外はなかつた。これが明治時代及び大正初期の佛和辭書の有様だつた。

1921(大正一〇)年に白水社から福岡島之助其他の著「模範佛和辭典」Nouveau Dictionnaire Français-Japonais が刊行された。これは私の親友であり同級生であつた岸田國士君が、私の家のすぐ近くで汝々としてその下受け原稿を書き上げて、その報酬で渡佛の船賃を得たという傳説のある辭書である。岸田君の名前は辭書に載つてはゐないが、流石に立派な仕事であつた。本格的な辭典として單語を語義によつて分類して、それを解釋し例示する方式を採用してゐる。この方式の佛和辭典は、これ以後今日まで三十數年間、新しく編纂されてはゐない。

1945(昭和二〇)年空襲によつて東京は燒野原となり、終戦の後、混沌とした時代が來た。燒死した書庫に十五坪を繼ぎ足して塾居しながら、私は暗澹たる氣持で世相を眺めてゐた。その時、大修館主人鈴木一平氏の訪問を受けた。息子同志が中學校で友達だつたからである。用件は、佛和辭典を私に編纂してくれという頼みである。私は前述のやうに、佛和辭典が1921年以來一度も新編されなかつたのを残念には感じてゐたが、私自身としては到底その任とも思はず、また爲すべき他の専門的な仕事を持つてゐたので、逡巡せざるを得なかつた。然し一方に於いて、われわれフランス文學語學を専攻するものは、現在の辭典を早く編纂直すことが、われわれの義務であると痛切に感じてゐた。そこで、編纂者を集めてこの事業を進めていくことを私が責任を以て實行するのが、恐らく辭典を作成する最も確實な最も可能な方法であらうと信じたから、心友辰野隆君に相談すると、早速やつてみると強く勧められた。私は、辭典編纂の方法と費用とスタッフと時間とについて熟考した。

私は先づ中平解君に手紙を書いた。1947(昭和二二)年九月八日附である。朝倉季雄君にも相談する手筈を調べた。三宅徳嘉君にも頼も準備をした。それはキティー颱風に襲はれる直前であつた。中平君は郷里の四國に歸つてゐて、いくら待つても返事が來ない。中平君が私の燒死した書庫に現れたのは、一ヶ月後の十月九日であつた。静岡縣三島に疎開したままの朝倉君も、東京に居居つてゐた三宅君も、十月十一日に私の書庫に來てくれた。そして私は辭典の編纂が可能であることを茲に確信した。中平君の家族を

四國から東京附近に移すため、私の埼玉に所有した屋敷を檢分に出掛けたのは十月二十五日だつた。十月三十日には第一回の編纂會議を大修館で開いた。十一月一日には三宅君が結婚式を挙げ、十二月二日には中平君の家族が私の屋敷に入った。かうして編纂の態勢が整つて、仕事が本格的に始つたのであつた。

其後、三宅君の渡佛に伴ひ、家島光一郎君、松下和則君に参加して貰ひ、更に武者小路實光君、田島宏君の協力をも得た。そして私自身も後には全てを放擲して、この辭典のために毎日の全時間を費した。更に最後には私の顧問として渡邊一夫君にも加つて貰つた。

編纂の方針や参照した書目は詳しく後述されるが、私が特に記したいのは、この辭典の全項目の初稿を悉く編纂者の一人が必ず自ら書いてあること、全項目に互に必ず編纂者の二人以上が閲讀し訂正し加筆してあることである。單語の語義の區分や排列は、著者自身が初稿を書くのでなければ確を期し難い。これが辭書の機械的に編輯されることを卑しむ所以である。また、二人以上が検討しなければ、必ず個人の習癖が現れ齟齬を生ずる恐れがある。それゆゑ或種の重要語に関しては、校正者以外に著者の三人四人が目を通してある。更にまた逆に、發音に関しては、三宅君が全單語を一々點檢して統一してある。其他、編纂者がみな集つて討議する編纂會議も百三十回近く開いてある。これらのことは随分無益な努力のやうではあるが、これが讀者に對するわれわれの忠實さであらうと考へてある。

初の計畫では五年で仕上げの豫定であつたが、たうとう十年の歳月を費してしまつた。最初から十年仕事をし續けて來た中平、朝倉、三宅の三君は、殊に感愴が深いであらう。戦後の十年の間には萬事が變つた。特に經濟的事情は全く一變した。其上期間が倍に延びた爲、初には豫想もしなかつた莫大な費用が掛つた。さういふ困難に對して、一言の不満も述べずに私達の計畫の通りに實行してくれた大修館社長鈴木一平氏の態度は、私としては尚ほ眞底から氣持がよかつた。小さな辭典にこれだけの時間と努力を掛ける違約を、看過したのみか却つて獎勵したとさへ、時には誤解した編纂者たちは、まづたく幸運と言はねばならぬ。また、特に數年前から編輯部として助力してくれた水野明路君や、水野君と力を協せて校正や調査に盡してくれた多くの諸君には、編纂者たちは心から感謝してある。更に大修館の鈴木敏夫君や川上市郎君の誠意や、印刷の責任者である中村元次郎君の努力にも、みな深く感謝してある。小辭典の特種な印刷技術に於いて、日本は恐らく世界の孰れも國よりも優れてゐるやうである。この小さな形態の中に、これだけの内容を盛り得た技術には、編纂者たちはみな驚きかつ喜んでゐる。かうして辭典は出来上つたが、出来るやうに訂正すべき個所が目につく。勿論、直ちに改訂の仕事に著手する。辭典には永久に完成はない。然しこの「スタンダード佛和辭典」は、現在までの佛和辭典とは十分に異つた存在の理由を、主張し得るものと私は信じてゐる。

一九五七年四月十八日

鈴木信太郎

1957年五月この辭典の初版を上梓してから、現在までに八たび版を重ねた。これほど多くの使用者の座右に侍して愛用されたことは、編纂者の喜びであり誇りであり、其上に正誤を得た幾多の教示を戴いて、益々辭典の完璧へ向つて邁進する勇氣を振り起したのであつた。編纂者は、版を重ねる毎に誤りを正し、不備を補ひ、最近の資料によつて新語と新語義を加へ、現在の刊行までに二千五百個所以上の修正を施した。そしてこの種の辭書としては、もはや技術的にこれ以上の内容を紙面に盛り得ない限界にまで達し、修正も一應打切らざるを得なくなつた。そこで茲に決定版として、第八版と、併せて卓上使用を考慮したデスク版とを刊行した次第である。今後の改訂及び補足に関しては、常に資料を蒐集し整理して、改版の機会に活用する計畫を懷いてゐる。

一九六〇年二月一日

DICTIONNAIRE  
STANDARD  
FRANÇAIS-  
JAPONAIS

スタンダード  
佛和辞典  
(革装)

定価 金 1800 円

1957 年 5 月 25 日 初版発行  
1970 年 4 月 1 日 18 版発行 ©

著者 鈴木信太郎  
中平解  
渡辺一夫  
朝倉季雄  
家島光一郎  
武者小路実光  
三宅徳嘉  
松下和則  
田島宏  
発行者 井上 堅

発行所 東京都千代田区 株式会社 大修館書店  
神田錦町 3-24

電話東京(291)3961-8  
振替貯金口座東京40504

装幀 原 弘 大修館製版部印行  
近藤製版・横山印刷・三水舎  
落丁本・乱丁本はお取替いたします。